

2024年12月の総評に代えて

○林 桂○

●桜望子●(山形県 30歳)

松の防風林つめたく  
街から隔離されたような  
私の仕事を父は知らない

【評】松の防風林のある海岸近くの郊外が仕事場。父と同居しているのだろうか。毎日仕事に出かける子が、どのような職場環境で、具体的には何をしているかは知らない父。家族でもこのような関係性はよくあることだろう。深い。

●青野 椰栄●(東京都 26歳)

神様が欲しい時  
わたしはニンジンを甘く煮る

【評】時折神に祈り、助けを求めたくなるときがある。「神様が欲しい時」は、そんなときだ。しかし、祈るのではなく、「ニンジンを甘く煮る」のだ。自らを慰める行為だ。神を信じるのが難しくなった大人になって生きることの切なさがある。

● さいう ● (石川県 19 歳)

せっけんの泡  
ほむほむ  
と生みだして  
神話のようなきみの手のひら

【評】「ほむほむ」がいい。魔法がかかった瞬間のようだ。「きみ」は、幼い子どもだろう。何よりも、「きみ」が、魔法を感じていることだろう。

● 歪いう子 ● (佐賀県 40 歳)

小春日をちよこれいとの大股で

【評】冬の暖かい日差しの中で、外遊びをしている子ども。チョコキで勝って、できるだけ進むために大股に歩く「ちよこれいと」。見つめる眼が温かい。

● ムクロジ ● (群馬県 17 歳)

小寒のテレビの照らすカップ麺

【評】カップ麺での一人の食事。見ている

テレビの明かりがカップ麺に届いている。勉強の小休止の夜食か。「テレビの照らす」がいい。どこか孤独の影がある。

● 柚子ぽん酢 ● (千葉県 21 歳)

ゆきだるまに手袋をゆずる妹

【評】「妹」はまだ幼いのだろう。「手袋をゆずる」には、妹にとって、雪だるまを自分が我慢してでも守るべき大切な存在であると思っていることが知られる言葉だ。

● 宮崎 莉々香 ● (神奈川県 28 歳)

ゆりの木通り愛日乳房隠し持ち

【評】ゆりの木を街路樹として植えた通り。ゆりの木は大木に育つ落葉樹。「愛日」は冬の日のこと。落葉して日に枝を透かした歩道を歩く。「乳房隠し持ち」ながら。桂信子は「ふところに乳房ある憂さ梅雨ながき」と書いている。女性性はいつも存在する問題だろう。

● 石村 まい ● (兵庫県 25 歳)

うつぶせたままに鏡を運ぶとき  
シーラカンスの肺のくらがり

【評】移動中に何者をも映さぬように表を下に向けられた鏡。それが深海の闇に生息するシーラカンスの、更にその肺の中の暗がりと感覚的に通う。かつての肺呼吸の名残を残しながら、機能停止のままの肺の暗さである。

●早瀬はづき●（大阪府 21歳）

あらゆる風が  
名を持つわけではないことの  
うれしさにシロフォンをたたいて

【評】この世に名付けられていないものが多く存在する。名付けることが人間の認識を示すものならば、当然名付けられないものの方が多いだろう。風ひとつとってもしかり。その世界をよしとする想いの「うれしさ」。

●あゆな●（群馬県 39歳）

湯たんぽの専用の鍋  
曾祖母が  
六人分も沸かしてくれる

【評】湯たんぽ専用の鍋がどのような形状をしているのか知らない。単にそれ以外に使わないということかもしれない。それでも、鍋から湯たんぽに湯を移すのには、何らかの方法が工夫されているのだろう。それを曾祖母が扱い、曾孫など家族六人の湯たんぽを用意するのだという。曾祖母のできることは、だんだんに狭められていくなかで、曾孫への仕事が残っていることに感慨がある。人は最後まで、あるいは最後まで人のためになることをしたい存在なのだろう。

● 帆立 ● (愛媛県 39歳)

小学校の校庭に  
銀杏の匂い  
未来も過去も無かった匂い

【評】聞かれれば、大きくなったら何になりたいとは答えても、本当にはその意味を分かっていない小学校低学年くらいの日々だろうか。その日その日がすべてなのだ。その頃の銀杏の匂いが今も記憶に残っている。毎日毎日を生きたゆえのものだろう。

● 落合 志帆 ● (栃木県 20 歳)

泣いても ばあちゃん  
生き返らなかった

【評】泣くことがあれば、何でも叶えてくれた「ばあちゃん」。しかし、「ばあちゃん」が亡くなって、最後に泣いたときには、生き返るという願いを叶えてくれなかった。私にとって、万能のはずの「ばあちゃん」だったのに。

● 川上 真央 ● (東京都 17 歳)

満員の電車に  
揺られるとき  
人は  
ひとしく牛乳瓶の明るさ

【評】「牛乳瓶の明るさ」の比喩に惹かれる。どこか曇りを残した透明感。電車の中の淀んだ明るさを、的確に言い止めている。

● 工藤 志与 ● (青森県 30 歳)

ブラッドオレンジのドライは  
虫の羽に似て

【評】名前のとおり、血のような赤さをもつ「ブラッドオレンジ」のドライフルーツ。それはカブトムシなどの甲殻の中に普段は折りたたまれているしわしわの羽のように見えるというのだろう。虫の羽に「ブラッドオレンジ」との類似性を見つけたことは眼のよさが光る。

● むしまる ●（大阪府 61 歳）

図書館が赤字だという政治家に  
行政の意味をたずねてみたい

【評】口語詩句の募集範囲には、箴言も含まれている。この作品はこれに該当するだろう。政治家に限らないが、世のリーダーはその根本に社会常識と教養を備えていてはじめて可能なはずである。社会教育施設である図書館は、行政が提供すべき施設であり、赤字黒字の範疇にはない。いわば道路を整備するのと同じである。それをこのように発言するリーダーがいるのは事実なのだろう。同じく社会教育施設である博物館を、観光施設だといって、教育委員会の社会教育課から知事部局に移したリーダーを私も知っている。

● 八尾保醒 ● (東京都 20 歳)

体に直線がなくて密やかな湯ざめ

【評】確かに私たちのどこをとっても「直線」はない。「直線」の概念を生み出したのは私たちであり、私たちの身体の外にあるものだ。「直線」の意味を考えさせられる。

● 村上 翔哉 ● (東京都 16 歳)

多分、明日熱を出す  
そんな感じで日々は続く

【評】心身困憊の毎日を送っていると、確かにこんな予感にとらわれる。実感させられる。選評を書こうとして、作者が16歳であることを知った。あるいは、十代の方が過酷な毎日を送っているのかもしれない。

● そばこ ● (東京都 13 歳)

手袋つければ手先が冷える

【評】感覚が鋭い作品だ。手袋をつけた最

初は、手袋の冷たさの方が伝わってくる。手を温めるはずの手袋の最初の印象が、それに反するものだ。作者は13歳。細やかさに脱帽。

●田村ひなり●（奈良県 21歳）

駅名に寺ばかりあり奈良線は  
大きな数珠として結ばれる

【評】見立ての面白さ。奈良線を大きな数珠に見立てる。根拠は数珠玉にあたる駅名にお寺の名前が連なっているから。だれもこんな愉快的な発想はできそうもない。